

こちらは、6月1日（日）に日向市文化交流センターで開催しました「脚本家 吉田恵里香さん トークイベント」の録画をもとに、文字起こしをしたものです。

日向市 第29回 人権について考える市民の集い

令和7年度地域人権啓発活動活性化事業



脚本家 吉田恵里香さん トークイベント

エンタメで描く

自分らしく生きること

『はて？』からつなぐ未来へ

聞き手 / 足立 佳代さん

(宮崎県男女共同参画地域推進員・日向市在住)

九州
初登壇



連続テレビ小説「虎に翼」脚本家

Yoshida Erika 吉田 恵里香さん

profile

1987年生まれ。神奈川県出身。テレビドラマから映画、アニメまで数々の作品の脚本を手がける。2024年には連続テレビ小説「虎に翼」の脚本を執筆した。

作品

映画 『ヒロイン失格』
ドラマ 『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』、
『君の花になる』、『生理のおじさんとその娘』など
小説 『恋せぬふたり』、『にじゅうよんのひとみ』など

受賞歴

ドラマ『恋せぬふたり』
第40回日向邦子賞、第77回文化庁芸術祭優秀賞
アニメ『ぼっち・ざ・ろっく!』
第9回ANIME TRENDING AWARDS最優秀脚色賞



書名「NHK連続テレビ小説 虎に翼 上」
作/吉田 恵里香 ノベライズ/豊田 美加
出版社/NHK出版

日時

令和7年

6月1日 日

13:00~14:30 (開場12:00~)

場所

日向市文化交流センター 大ホール

●手話通訳あり ●託児あり (申込締切/5月23日まで
申し込み▶TEL (0982) 54-0227)

入場
無料

主催/日向市、日向市人権・同和問題啓発推進協議会

後援/日向市教育委員会、日向市男女共同参画社会づくり推進ルーム協議会、
宮崎県男女共同参画センター、宮崎日日新聞社、夕刊デイリー新聞社、ケーブルメディアワイワイ、
朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞西部本社、NHK宮崎放送局、MRT宮崎放送、
UMKテレビ宮崎、時事通信社宮崎支局、共同通信宮崎支局、0982(株)、日向経済新聞

お問合せ

日向市役所 地域コミュニティ課
人権・同和行政・男女共同参画推進室
TEL (0982) 54-0227

足立佳代さん登壇

(足立佳代さん)

皆さん、こんにちは。ただいま、ご紹介いただきました足立佳代と申します。本日は、このような大役を仰せつかり緊張しております。私は、いろんなイベントでほとんど緊張しないんですが、今日はさすがにこういう大きな会場で、しかも吉田さんをお迎えしてということで少し緊張しております。

今日は、吉田さんの思いやお考えをお伺いしながら、皆様とご一緒に語り合える時間になるといいなと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

それでは吉田さんをお招きしたいと思います。皆さん、大きな拍手でお迎えください。吉田さん、どうぞお入りください。

吉田恵里香さん登壇

(足立佳代さん)

吉田さん、ようこそ日向市へいらっしゃいました。本日ご来場の皆さんとともにお会いできるのを大変楽しみにしておりました。

初めに、改めまして吉田さんの簡単なお紹介をいたします。吉田さんはテレビドラマから映画、アニメ、小説までたくさんの脚本、そして小説も手がけられています。去年は、女性の生きづらさを中心に描かれた連続テレビ小説『虎に翼』、朝ドラですね、先ほど市長もお話しされていましたが、大反響を巻き起こされました。

現在は執筆活動をされながら、人権課題に関する講演も行っていらっしゃいます。今日は皆様からお寄せいただいた吉田さんへのご質問を中心にお話を伺いながら、ともに語り合う時間にしたいと考えております。2時30分までの約1時間20分ほどですが、どうぞよろしくお願いいたします。

(足立佳代さん)

それでは、吉田さんは九州でお話されるのは初めてと伺っておりますが。今まで九州にいらっしゃったことはあるのでしょうか？

(吉田恵里香さん)

これが本当に今回が初めて九州に訪れることができ、この機会をいただいて本当に嬉しく思っております。ありがとうございます。

(足立佳代さん)

では宮崎県も初めてと思うんですが。

(吉田恵里香さん)

そうですね、そうなります。

(足立佳代さん)

宮崎の印象はいかがでしたか？

(吉田恵里香さん)

昨日宮崎に着いたんですけども、すごくお天気に恵まれて、自然豊かで、食べるものが何でも美味しく、そしてタクシーの運転手さんから、様々な出会う方にとってもよくしていただき、美味しいお店の場所や、空港ならここで食べるといいよとか、教えていただくことが多くて、とても温かな気持ちになりました。ありがとうございます。

(足立佳代さん)

ちょうど梅雨入りしてまして、宮崎どうなるかなって思ってたんですけど、昨日と今日は晴れで、この晴れた宮崎をぜひ味わっていただきたいと思ってたので、とてもラッキーでした。

(吉田恵里香さん)

本当に運が良かったです。ありがとうございます。

(足立佳代さん)

では、会場の皆様はどちらからいらっしゃったのか、ちょっとお聞きしたいと思います。まず日向市から参加されている方、手を挙げてください。多いですね。

(吉田恵里香さん)

ありがとうございます。

(足立佳代さん)

では、日向市以外の県内からお越しの方、いかがでしょうか？これも多いですね。

(吉田恵里香さん)

ありがとうございます。

(足立佳代さん)

では、宮崎県以外、県外からお越しの方、いらっしゃいますか？

(吉田恵里香さん)

ありがとうございます。

(足立佳代さん)

県内はもちろん、県外からもたくさん、本当にありがとうございます。
それでは皆様からお寄せいただいた質問をこちらでまとめましたので、それをもとにお

話を伺いたいと思います。質問の他にですね、ファンレターもありました。初めにそれを読ませていただきます。

(吉田恵里香さん)

ありがとうございます。

(足立佳代さん)

『虎に翼』をととても楽しく拝見しました。毎日リアルで3回見ました。BS、総合、そしてまたお昼ですね。録画も撮っておいて、好きなシーンは何度も見ました。その前の『恋せぬふたり』も面白かったです。音楽が阿部海太郎さんというのも良かったです。そんな方が来てくださるというのに、6月1日に予定があって参加できないのがとても残念です。

残念ですね。というファンレターが届いておりました。会場の皆様、連続テレビ小説はご覧になったのでしょうか？いかがですか？

(足立佳代さん)

ありがとうございます。ではNHKドラマ『恋せぬふたり』、高橋一生さんと岸井ゆきのさんが出演されていたんですが、ご覧いただいた方はいらっしゃいますか？

(吉田恵里香さん)

ありがとうございます。

(足立佳代さん)

結構見ていただいています。ありがとうございます。

(足立佳代さん)

私も『虎に翼』、それから『恋せぬふたり』、そして『生理のおじさんとその娘』を拝見いたしました。それからお寄せいただいた声の中には次のようなものもありました。ご紹介いたします。「寅ちゃんこと伊藤沙莉さんの演技に毎朝泣かされました。『虎に翼』を見て娘（長女11歳）が弁護士になりたいと語っていました。私も作品全話を見てとても感動とワクワクをいただきました。」39歳の方です。今日会場においででしょうか？

(足立佳代さん)

ありがとうございます。そういうお声もいただいております。

それでは、皆さんたくさん見ていらっしゃった連続テレビ小説『虎に翼』に関する質問をいたします。

この『虎に翼』なんですけれども、どのようなテーマを持って脚本を書かれたのでしょうか？

(吉田恵里香さん)

朝ドラというのは、企画の段階でテーマが決まっているもの、例えば「何々県を舞台にしたものを書いてください」とオファーがあるものと、ゼロから考えるものの2パターンがありまして、私は後者だったので、まず、強い女性、気が強いとか態度が大きいとか、いわゆる朝ドラを見ない方が思われる「天真爛漫な朝ドラの主人公」みたいな子が出てこない話を書きたいな、というのが一番にありました。なので、そこから何の話を書こうかなと思った時に、一番最初はケア労働についての話を書こうかなと思ったんですが、紆余曲折ありまして、自分自身がずっとテーマにしている「自分の選択は自分が決める」というのが大きなテーマになっています。それが本当に『虎に翼』の主人公のモデルである三淵嘉子さんという女性初の弁護士になった方の人生にも当てはまりましたし、その法曹界のある人権も、まさにこの14条ですね、素敵なものを書いていただいております。14条にある人権というものにまさにぴったりなことだなと思いましたので、そこから一番最初のテーマを決めていったという感じです。

(足立佳代さん)

ありがとうございます。いつもの天真爛漫な主人公の朝ドラではないということも私も見ていて感じました。それで今まであんまり朝ドラを見てなかったという方もたくさん見てらっしゃいました。

(吉田恵里香さん)

そうですね。ヘビー朝ドラユーザーはそんな主人公ばかりじゃないってみんな知ってるんですけど、いわゆる朝ドラを見たことがない人って、なんかそういう明るい主人公が出てくるんでしょうとか、なんか我慢して泣いて笑顔で終わるんでしょうみたいな、うがった見方をしてる方がとても多かったので、私自身すごい朝ドラが好きなので、様々な主人公たちが出てくる枠、番組のシリーズなんだよっていうのを見せたかったというのもあります。

(足立佳代さん)

ありがとうございます。狙いがぴたりはまったということですね。では、今お話の中にも出てきましたが、ここに掲げてある憲法第14条「法の下での平等」、これが第1話から冒頭から強く印象付けられていました。今も人権ということをちょっとおっしゃいましたが、そのねらいについて、これはずっと続いていたと思うんですね。そのことについて、どのようなメッセージを伝えたかったかについてお話しいただけますか。



(吉田恵里香さん)

わかりました。まずはそのモデルとなった三淵さんが、憲法が制定された時にすごく新しい時代が始まる、自分の人生はここから始まったんだということを強く思った、というのをインタビューで残されていたのが大きいです。自分自身も改めて憲法を読み直した時に、どうしても大々的に出てくるのは9条とか、そういう条文が多いと思うんですけど、改めて14条を見た時に、すごく自分が大事にしているテーマが詰まっているなというのがあります。

この最後が「差別しない」じゃなくて「差別されない」という、どちらに向けたメッセージなのかって考えると、すごくいい文章だなと思っていて。「差別しない」じゃなくて「されない」っていう、差別されてきた人たちに向けた文章であるというのが、とても自分の中では心に引っかかったので、大事に取り上げてきました。あと、今回すごい学生さんが多いので、朝ドラって絶対登校してる時間に始まるものだから見れるはずがないもの話をしてるのが大変心苦しいんですけどね、日曜日なのにありがとうございます、すみません。

(足立佳代さん)

今は録画もありますし、NHK プラスもありますので、上手に見てくださってるんだと思います。

(吉田恵里香さん)

NHKの人みたいですごい、ありがとうございます。

(足立佳代さん)

本当にですね、「差別されない」というところの重要性、今私も気づきました。ドラマの中に出てくる人たち、本当に「差別されない」という視点で描かれていたなと思いました。どうでしょうか。

(吉田恵里香さん)

そうですね、すごくそこは大事にしたところなんで、ありがとうございます。日常生活を送っていると、特に普段触れ合う人としてしか本当に関わらないので、その人の人生とか経験値とか、その人がどう思うかってことがメインになってしまって、なかなか自分たちが何を省いて、何に目を背けているかっていうのがなかなか分からないことが多いと思うんですけど、それって結構エンターテインメントの責任がすごい大きい気がしていて、エンターテインメントに出てくる登場人物って本当に様々なマジョリティに属してる人たちばかりで構成されていて、逆にマイノリティが出てくると、なんで出てきてるのか理由がないとか、いろんなものを盛り込みすぎているみたいな話が出るんですけど、いやみんな生きてるので、この社会で生きて生活してる人が出るのがおかしいって思われることがおかしいと思って私はいるので、今回は半年という時間がありましたので、様々な普段省かれてしまったり、エンターテインメントの手の間から隙間からこぼれて省略されてしまうものを書きたいなという気持ちがとてもありました。

(足立佳代さん)

そうですね。マイノリティの声、それから無意識の差別、そういうものがやはりドラマの中で現れていたと思うんですね。大変丁寧に描かれていたと思うんですが、吉田さんが脚本をお書きになる時に、マイノリティであるとか、そういうことに関してリサーチをされたり配慮されたり、そういうことがあったのでしょうか。

(吉田恵里香さん)

そうですね、『虎に翼』に関しては、本当にまずは考証資料を読み込む、取材をするというのが一番で、様々な法律考証、マイノリティ考証、それから歴史考証の様々なものが考証の方が入っておりましたので、まずそこから自分たちができるもの、自分たちが描きたいテーマができるのかと考えるのが一番大変なところでしたね。

(足立佳代さん)

そうですね。登場人物の中で、轟さんが出てきて、そしてその恋愛の相手っていうのも出てきましたけど、なかなか朝ドラではそういうものはちょっと見ないという感じがしましたが、いかがですか。

(吉田恵里香さん)

そうですね、これは本当に視聴者の方というよりは作り手の問題なんですけど、多くの人に届けようとした時になぜか多くの人に届くからマジョリティがメインになるっていうのが、最近は変わってきましたが、それが当たり前の考え方というか、マイノリティとか様々なものを扱う時に理由がなければいけないって思われることが多かったとあって、私自身も理由なくマイノリティの方が登場人物としてメインで出てくるっていうのは当たり前のことだと思っているのでやってるんですけども、特に轟はそうですね、最初からセクシャリティ、彼が性自認をしてなかったのも、最初は彼が自分が同性愛者であることに気づいてないんですけども、そういうことも含めてやりたかったというのはありますし、朝ドラって本当に時計代わりにご覧になる方がとても多いので、普段興味がなくても仕方なく半年間見てくださる、とてもありがたい視聴者の方が多いので、普段私の作品に触れないような方が見てもらえる絶好のチャンスだと思いましたので、そういう様々な自分が普段訴えたいことはぎゅっと盛り込んだつもりでもあります。

(足立佳代さん)

ちょっとまた突っ込んでなんですけれども、「ひゃんちゃん」も在日コリアンで、それでその場面がやっぱり朝ドラでというのもとても新鮮だったというか、それもあるんですが、いかがですか。

(吉田恵里香さん)

そうですね、それが新鮮であることが本来は問題というか、これだけ戦前戦中戦後を扱ってきた作品なので、それが先鋭的というのが難しい、なかなか自分としては複雑なんですけど、自分としてもやっぱり主題ではないので書き切れていない部分がとても多いなという自分の中でも反省はあるものなので、この先様々な、これから半年に一度作られていく朝ドラなどでまた広く扱われていければいいんじゃないか、当たり前になればいいんじゃないかなとは思っています。

(足立佳代さん)

ありがとうございます。『虎に翼』での内容は、今までの吉田さんご自身の何か経験などに関連がありましたでしょうか。

(吉田恵里香さん)

そういう意味で言うと私自身は、大きな深い心の傷になるような経験というものはないと言っていいと思うんですけども、でもやっぱり生きていく中で小さなささくれのような傷というものはたくさんあり、それが深くなっていく時に、そもそもこのささくれって作る必要があったのだろうか、というような人生経験とか、そういうもので片付けられがちな、男女だけじゃないですね、様々な色々な蔑視とか差別とかがあると思うんですけど、そういうものは自分の経験を入れるとかはないんですけど、自分がこれをこの言葉をかけてもらったら当時の自分が報われるかもな、みたいな目線は持って作っていました。

(足立佳代さん)

ありがとうございます。そうですね、『虎に翼』は女性だけではなくて男性の生きづらさも描かれました。性別に関わらず誰もが生きやすい社会にするために必要な意識改革について、どんなふうにお考えですか。

(吉田恵里香さん)

そうですね、どんな物事もどちらかに偏って喋った時点でどちらかの圧が生まれてしまうと思うので、どんなに例えば、実際問題として女性蔑視とか女性格差とか様々な問題は今も山積みなんですけども、それをだからといって女性側だけ描いては何も成長もメッセージも受けられないなとは思いました。男性側の生き苦しさとか、例えば「女らしくない」って言葉はだいぶ使われなくなってきたんですけど、「男らしくない」は今もすごく使われてしまうというのが、性別で決められたことをやるっていうのがすごく苦手というか、そういうことがすごい不毛な、例えばデートの時に奢る、奢らない、割り勘なのかから始まり、リードしてほしい、ほしくない、みないな不毛なことにつながっていくので、そもそも性別で何かを分けないという部分と、性別でどうしても分けられてしまう部分でどう平等であるか、対等であるかということを考えるべきだと思っていますし、男性でもない、女性でもない、様々な性別の方がいらっしゃいますし、自分の自認がどちらか分からない方もいらっしゃいますので、あまり二極で考えることも良くないと思っていますので、そもそも、どちらもみんなしんどい、みんな生きづらい、みんな苦しいし余裕がないんだよ、という部分は大事に描いているつもりです。

(足立佳代さん)

『虎に翼』の中で、弟の直明が大黒柱になると言って、「いや、ならなくていい」という場面がありましたね。その後でも寅子はだんだん大黒柱になっていくというところがとても興味深く見たんですけど、その辺りはいかがでしょうか。

(吉田恵里香さん)

そうですね、やっぱり自分の中でどちらが上・下ができてしまうって、実は性別ではなくて、家庭内においてはどちらが経済を握っているか、どちらが多く稼いでいるかってことが多くなりがちで、それが男女の差から生まれるわけでもないし、その中でケアし合っているのがあって、かといって別に対等に稼いでいればいいというわけではなく、めっちゃくちゃ稼いだり働いている裏では誰かがケアをしたり、誰かが支えてくれる、そのセットなので、それが両方ちゃんとリスペクトされることを描く必要があるなとは思っていて、家庭のため、子供のため、両親のため、家族のために専業として家事をなさる方がダメとか、そういうことは全く思わないですし、それをちゃんと敬意を持って扱われることが大事なんですけど、なぜか2軍扱いされてしまうことが特に作品、エンターテインメントでは多いなと思い、それを描きたかったなというのと、多分、花江ちゃん、あ、ごめんなさい、『虎に翼』を見てる前提で喋ります、すいません。花江ちゃんという寅子の同級生で、寅子のお兄さんと結婚された義理の姉になる花江さんというキャラクターがいるんですけど

も、花江さんが多分主人公のドラマで寅子が男の人だったら、あそこまで寅子が家庭を顧みないとかは言われないうちです。それはなぜかって、やっぱり彼女が女性だからってというのがとても多いと思いましたが、そういう違和感みたいなのを寅子の大黒柱編はすごく意識して書いています。

（足立佳代さん）

ありがとうございます。そうですね、吉田さんのドラマを見てると、いろんな人が否定されないというところがあると思うんです。どんな方が出てきて、そして対立があったとしても否定はされないというふうに印象を受けるんですけども、そこはいかがでしょう。

（吉田恵里香さん）

そうですね、やっぱり完全な善人もいないように、完全な悪人もいないとっているの、その人が生まれた環境や状況、経済差や環境差でも変わってくるもので、完全な悪みたいにはしたくないですし、そもそも完全な悪みたいな人がいて、その人に「ダメですよ」って言ってなんとかなるんだったら、こんな世の中になんてないって思っているの、やっぱりお互い対話を重ね、根気強くやっていくしかないのかなとは思っています。

（足立佳代さん）

ありがとうございます。今「対話」というのが出ましたけど、本当に対話って、話をすればいいようでも難しいことだなんて思うんですよね。その対話という時に、吉田さんはどんなことを考えて対話されていますか。

（吉田恵里香さん）

そうですね、みなさん私も含めなんですけど、お話が必ずしも上手な人ばかりではなくて、本当はこのメインとなる幹の話をしたいのに、まず枝葉の先から始めないと話せない人っていうのもいるんですよ。だから対話が必要な時ほど、相手の話を最後まで、ちょっと長いとか何の話してるんだらうなって思う時もあると思うんですけど、最後まで聞くと、すごい怒ってた枝葉の話が実はメインじゃなくて、「私は困ってて助けが欲しいんだ」ってことがメインな話なんだなって分かってくるとか、そういうことがあるので、とても根気があるし、「何の話してんだらうな」って思うことはあると思うんですけど、それはお互い様ということで、途中で遮らない、枝葉な話をしてるのに「これはこうでこうでしょう。うんうん、もういい」みたいに「話長い」とか言わないで、最後まで話を聞くっていうのは大事にしています。

（足立佳代さん）

そうですね、聞くということですね。本当に私もそう思います。

この『虎に翼』は本当に大きな反響を呼んだんですけども、その理由について、今も

いろいろお話いただきましたが、他にどんなことがあるとお考えですか。

（吉田恵里香さん）

やっぱり今、世界の状況とか社会状況とかも、残念ながらなかなか不景気で様々な格差が広がり、そういう時には差別も拡大して深まっていくというのが残念ながらこの世の定めというか、今がすごくそういう時期に来ているからこそ危機感を持ってる人がいるのかなと思ったのと、あとやっぱり男女平等とかってピンとこない人もいるのは確かで、特に大学を出るぐらいまでは大差ないというか、それこそ男女で差がない風に、勉強でも学校でもそうなることが多いので、という人も多いとっていて、でも社会に出た後にすごくそれを感じる、感じてこなかった人ほど感じてしまうというのがありますので、ちょっとささくれだった心を持っての方に響いたのかなとは勝手に思っています。あと単純にやっぱり伊藤さんが素晴らしいというのと、やっぱり米津さんが素晴らしいってのも大きいのかなとは思っています。

（足立佳代さん）

演技とか音楽もですね。

演出も今出ましたけど、俳優さんの演技、それから演出などについて、吉田さんご自身はどう感じになりましたか。

（吉田恵里香さん）

そうですね、メインの榎川善郎さんという方がメイン演出なんですけど、もうメインで演出も朝ドラを何回もしてきていて、メインでないのを入れたら 20 本以上朝ドラに携わっている方と初タッグで、私が初めての朝ドラだったので組めたのがとても良くて、膨大な資料と経験値があったので、自分がそれをある前提のところから様々な物語を組めたのがすごく良くて、すごく演出に恵まれたというか、映像は本当にチームワークなので、一個でも相性が悪かったり、チームの仲が悪くなると途端に映像に反映されてしまうので、そういう意味ですごく全てのチームワークが良かったなと思っています。

（足立佳代さん）

ドラマの中で本当に「あ、今もあるある」っていう、そういう普遍的なものがたくさんあって、今、吉田さんがおっしゃった中で、大学卒業する、学校卒業するぐらいまではそんなに大きく差別を感じないけれども、就職をしてから色々感じる、っていうところで、ちょっとまたドラマの中になりますけど、穂高先生と寅子の関係ですよ。妊娠が分かった時の、そこもなんか今に共通するものがあるんじゃないかと思うんですが、そのところはいかがでしょうか。

（吉田恵里香さん）

分かりやすく自分の敵とか、めちゃくちゃ差別されてたらその人に心なんて多分開かないんですけど、やっぱり一番現代社会で心が折れる瞬間って、自分の理解者とか味方だと

思っていた人から無意識に滲む偏見とか蔑視とかを浴びてしまった時に心が折れるんじゃないかなと思っていて、みんないい人ではありたいと思ってるんですけど、そのいい人のベクトルが相手に向いてるのか自分に向いてるのかってのはとても大きい気がしていて、誰が主語のいいことなのかっていうのがなかなか見極められなくなっていくっていうのが大きいかなと思っていて、それが私、相談者、寅子に向いてるのか穂高先生に向いてるのかでまた変わってくるっていうのは大きいかなと思います。

（足立佳代さん）

ありがとうございます。現代もジェンダー、ハラスメント、いろいろあるんですけども、ドラマの中では昭和の時代でしたが、現代のジェンダー、ハラスメントについて、吉田さんが「これは」と思ってらっしゃるようなことがありますか。

（吉田恵里香さん）

そうですね、良くなってる部分もちろんありますし、基本的にはじわじわ変わっていくもので、それこそ昭和のゴシップ誌とか読むと「こんなことを雑誌が書いていいのか」というような、もうすごい差別にまみれたこととか、女性の容姿をすごくいろんなこと言ったりとかってことがたくさんあるんです。そういうのを見ると良くなってきてるなと思うんですけど、やっぱりする側も攻撃する側も無意識だったりもするし、手が込んでくるので、なかなか分かりやすく自分が攻撃されてるなとか、差別されてるなっていうのが分からないことが多いので、より複雑で多様化してるというか、シンプルに「この人に何て言われた」で終わらないセクハラとか差別とかが多いのかなとは思いますが。

（足立佳代さん）

ありがとうございます。ドラマではたくさんの「はて」が出てきましたが、今、吉田さんが感じていらっしゃる「はて」というのがありますか。

（吉田恵里香さん）

「はて」というか、やっぱり今いろんなものが戻りが来ていて、いろいろ議論されたり発展していたものが戻ってきてるのをすごく感じていて、それは様々な世界状況とか、誰が首相だとか総理大臣とか、いろんなことが絡んでくることなんですけど、だんだん様々な人に余裕がなくなってきた時に、一番分かりやすくやりやすく文句を言われたり叩かれたりするのって、権力を持ってない弱い立場の人たちなので、それはすごく抗っていきいたいというか、「はて」というか怒っていきいたいという気持ちはありますね。

（足立佳代さん）

やはり弱い立場の人っていうのを吉田さん、見て書いてらっしゃると思うんですけども、もう少し弱い立場の人についてのお考えを。

(吉田恵里香さん)

そうですね、本当に様々な経済格差とか家庭環境とか、元々生まれ育った場所とか、様々な理由で苦しい思い、生きづらさを持っている方がいらっしゃると思うんですけど、やっぱり一番問題なのは、その弱さとかを見せることが恥ずかしいとか、辛いつて思うとか、「かわいそう」って思われることが恥ずかしいっていう風に思う社会になってるってことで、なんでこの「弱い」とか「苦しい」って思うことが恥ずかしいってなってるんだらうっていうのはすごく感じていて、そういう意味で自分の作品とかでは、今アニメで『前橋ウィッチーズ』というアニメをやってるんですけども、そこでもやっぱり弱さについてとか欠点についてってものは触れていて、その「弱さ」って言葉があれなのかなと思うので、やっぱり「生きづらさ」とか「しんどさ」みたいな言葉に変えて言いやすくなったらいいな、みたいなことはありますね。

(吉田恵里香さん)

でも、私、最近をよく「性善説」「性悪説」みたいな言葉があると思うんですけど、すごく「性弱説」というか、人は生まれながらして弱いんだっていうのをすごく前提で、多分ここにいる人みんな弱いから、どっちかに考え方が偏っちゃったり、自分を強く見せようとしたりとか、そういうことが生まれてくる。そこは悪い人とかいい人が前提ではなくて、弱い人だっというのを思うことが、みんな弱いつてことが思えればいいのかと思って、最近作品を書いています。

(足立佳代さん)

そうですね。こう「弱い」という視点、やはり期待されるものに対して自分はこうなければならぬとか思うと、やっぱり強くならなきゃとか、気にしたりしますよね。そういうところで弱さを認める、それを出すことができるとなると、随分生きやすいんじゃないかなと思います。

(吉田恵里香さん)

そうですね。まずは大人からというか、それを若い人にやらせようとする傾向が今すごいあるなと思ってんですけど、なんか大人ができてないのになんで子供に強要するんだらうっていうのはすごく思っているんで、まずその社会にするには大人から弱さを出していく必要があるのかなとは思ってます。

(足立佳代さん)

今、ちょっと子供に対して強要しているようなところ、もう少し具体的にお話していただけますか。

(吉田恵里香さん)

それこそいろんな問題が出てくると思うんですけど、例えば「政治に関心を持とう」とか「声をあげよう」とか、例えばルッキズムとか「容姿は関係ない」とかって言うけど、

でも大人が作ってる社会ですから、全部それを子供にやらせて、子供から変えていこうと
かっていうのは、なんかすごく大人が傲慢、自分たちが努力しないでいい社会にしようと
してるなと思ってるので、それをしないでやること自体にすごく問題があるなと思うの
で、でもまあ若い人もいずれは大人になるので、その大人になった時にどうできるかって
ことを、大人たちが見せていく必要があるのかなっていうのは常に思ってます。

(足立佳代さん)

そうですね、本当に、ことが進まない時に若者にこうしろって言いがちですけども。

(吉田恵里香さん)

嫌なバトンを全部若い人に投げてるだけですから、それってムカつきます。
言葉が汚かった、ごめんなさい。

(足立佳代さん)

いやいや、そういうのも必要ではないかと思います。時々吉田さん、「呪い」っていうお
言葉も使われますよね。

(吉田恵里香さん)

そうですね、いい子ちゃんの呪いとか、「いい子ね」とか「気が利くね」とかもすごい危
ないなと思ってて、じゃあ次私やるねとか僕やるねってなるならいいんですけど、「こいつ
が全部やるな」ってロックオンされると、大人の方が余計、「この人がやってくれるだろう」
とか、「気が付いた人がやればいいんだよ論」みたいなことで、どんどんどんどんケアをや
らせていくっていうのが、大人になればなるほどめっちゃくちゃ多いので、若い人は本当に
なんかこう、社会人になった時とかに「気が利く」と思われる必要はないっていうか、そ
れは仕事でやればいいので、お茶を汲んだりサラダを取り分けたりとか、そういうことし
ないでねっていつも私は言ってます。でも若い女優さんとかがいると、やっぱりやるん
ですよね。それは素晴らしいと思うんですけど、なんでやってるの、本当女の子だけなんて
なるんですよね。だからもうやらないでって、私、おじさんお婆さんがやるから、あなた
たちは座っててっていつも言うんですけど、そういうやることがダメなわけじゃなくて、
それが役割になって、それが呪いになっていくとか、今まで笑って聞いてくれてたのに急
に怒られたとか、冗談でひどいこと言われた時に笑っちゃって、「あの人は何でもいい人だ
から言っただけ」みたいなになると、それが呪いになっていくってのがめっちゃくちゃあるの
で、私も含め気をつけて生きていきたいなと思っています。

そうですね、ついついやってしまうことっていうのもあると思って。

例えば「いいお母さんになりそうだね」とか言っちゃうじゃないですか。その人が結婚
したいかも、子供が欲しいかも分からないのに、なんか褒めたつもりなんですよね。でも
その人を「いい人だね」とか「優しいね」とかそういうことでやればいいのに、こう不要
な言葉をどうしても人は誰かをカテゴライズしてしまう生き物なので、それが多いなと。
自分も含めて、いつも反省の日々です。

(足立佳代さん)

本当にカテゴライズするっていうところから差別が始まっていくような気がするんですよ。

(吉田恵里香さん)

そうですね。でも全く差別は肯定しないんですけど、人ってカテゴライズする生き物っていうか、それって本能的なもので、ずっと考えてたら疲れちゃうじゃないですか。多分赤ちゃんと一緒に「あ、空青い」とか「あ、手黒い」とかずっとやってたらもう疲れちゃうし、そんなことして生きていけないから、「これはこういうもの」ってどんどんカテゴライズして生きてくと思っていて、それは本能でパワーを貯めてくんだと思うんですけど、でもカテゴライズすると絶対差別は生まれるんですよ。そこに偏見とか差別が生まれて、でも仕方ない部分があるときに、私たち人間なので理性があるので、その理性でカテゴライズしつつも理性で補っていくってことができる生き物だと思っているので、カテゴライズは大事、だけど、その偏見や差別に流されないってことを大事にしたいなとは思っています。

(足立佳代さん)

それからですね、ちょっと重なるかもしれないんですけども、描かれる人の中で「ないもの」として扱われる人を描きたいっていうのも読んだりしたんですけども、そこはいかがでしょうか。

(吉田恵里香さん)

そうですね、なんとなくなんですけど、最近減りましたけど、エンターテインメントで「1作品1セクシャルマイノリティ」みたいな、この作品で例えばゲイの人が出てきたから、もうその枠はいっぱいです、レズビアンは出せません、みたいな、謎の「2人で2つ出てくると盛りすぎ」「やりすぎ」ってなるのがすごく腹立たしいなと思っていて、だからそれってジャッジする目線とか、その人のセクシャリティで何かを判断するってすごく浅いというか、すごく差別にまみれているのにそれをやるのがすごく腹が立っているの、半年あるんだったらもちろん描ききれなかったものはたくさんあるんですけども、理由があってもなくても様々な人を描きたいっていうのはありますし、周りに打ち明けてないだけで、みんな何かのマジョリティですし、何かのマイノリティですので、そういうことを抱きながら私は書いております。

(足立佳代さん)

ありがとうございます。マジョリティでいる以上、誰かを傷つけているっていうのもおっしゃってるんですが。

(吉田恵里香さん)

そうですね、それは絶対あります。この中で例えば「差別してない人」って言って手を

挙げた人が一番やばいと思います。全員必ず差別してるし、私も何かの偏見と差別にまみれて生きてるので、何かしらの差別はみんな持ってるし、それを開き直ったらもう人として終わってるんですけど、そうじゃなくて、内なる優位性の上でみんなあぐらをかいて生きているので、「差別してないから」という理由が一番まずいし、「自分が差別してないから何なんだ」という話なので、それは関係ないってのは常に思っています。



（足立佳代さん）

ありがとうございます。お仕事についてのご質問もあるんですね。脚本家、小説家としてのお仕事、脚本家・小説家と2つ並べて名乗ってらっしゃるので、そういうお仕事についてのお考えをお聞かせください。

（吉田恵里香さん）

そうですね。小説と脚本は、料理人っていう枠があったとしたら寿司とパティシエぐらい違うっていうか、文章で、小説で一人で全部担って、その匂いとか景色とか様々な演出も含めて全部担うのが小説で、小説の場合はもうそれこそ起承転結がなくてもいいっていうか、起で終わってもいいし、承で終わってもいいというか、あとどこで誰が何をしてるかを明確にしなくてもいいという、小説にはすごい自由があるんですけど、映像にしかできないものがありますね。やっぱり文章より映像の方が多くの情報を伝えることができますし、自分一人ではやりきれない、例えば役者さんが演じてくれる、音楽をつけてくれる、

アニメでしたら絵をつけてもらえるというか、そういう全然違う仕事なので、使う脳みそも違うかなという感じですね。

(足立佳代さん)

多くの作品を手がけてこられました、脚本家として、『虎に翼』の作品についてちょっとお話ししていただけますか。

(吉田恵里香さん)

私は原作がついてる作品もよくやるんですけど、アニメで『ぼっち・ぎ・ろっく!』という作品の脚本とシリーズ構成をやらせていただいたんですけど、いわゆる「友達がいな女の子」、すごい雑に説明すると、そんなアニメじゃないってなっちゃうんですけど、ギターと出会い、一人でずっとギターを練習して、それこそ動画を上げてみてすごく上達するんですけど、友達がいなからバンドが組めなかった子が、でも人前でコミュニケーション取るのがすごく苦手だから下手になっちゃう。そういう子がバンドを組みながらプロを目指していくという話なんですけど、原作が4コマ漫画なので、そこから物語に落とし込む時に音楽のチームとすごく計算しながら作ったんですけど、その中でもアニメの仕事だからそんなこと思う人いないって、そういう偏見を持ってる方もいるかもしれないんですけど、未成年の高校生が主役なので、未成年を扱う時にどうしようかみたいな話はすごくしたんですね。『ぼっち・ぎ・ろっく!』の時も。別にそれって大々的に打ち出す必要はないんですけど、例えばこの裸のシーンありますかねとか、そういう話とかもはじめて、そういうことを真摯にやっていったチームだったから、ありがたいことにたくさんの方に見ていただく作品になったなどはすごく思っていて。あと作品の原作がそうなんですけど、すごくいいなと思ったのが、ちょっと人昔前、例えば「陰キャ」とか言われたり、友達がいなとかいう子が、友達ができることがいいとか、陽気になったりコミュニケーションが取れるようになることが素晴らしい、みたいな、エンタメのゴールを組むことが多かったんですけど、この作品はそうではなくて、アニメでもそれはすごく意識したんですけど、変わらないままでも受け入れてくれるコミュニティはあるし、変わらないようでも人って変わっているから、そのままの特性のまま自分が生きられる場所があるよっていうことをすごく描いてる作品なので、もしまだご覧になってない方がいたらサブスク各社で配信中ですので、よろしければお願いします。2期も一応発表になっておりまして、結構先だと思うんですけど、よろしくお願いします。

(足立佳代さん)

バンドで歌う歌の歌詞は吉田さんが書いたんですか。

(吉田恵里香さん)

私が一つ書いたのは、作中で後藤ひとりという主人公が歌う、ぼっちちゃんが歌う曲だけ一つ、それはもうシナリオで書きちゃったので、その作詞をしたっていうくらいで、あとは本当にプロのチームが作ってます。

(足立佳代さん)

今、例えば「友達がいなくてもいい」とか「一人でも平気」とか、さらっと言う、それがまたちょっとドラマに、『虎に翼』に戻りますが、娘の優未さんがそういうことをちょっとと言うシーンがありましたね。そういったこともやっぱり繋がってますか。

(吉田恵里香さん)

そうですね、友達がいるかいないかはその本人が決めればいいと思いますし、友達がたくさんいる風になりたいと思うかどうかってことが大事だなと思うんですけど、特に学生の方は狭いコミュニティで生きてるので、それがどう人に見られるかとかっていうことがとても多くなると思いましたので、せめて自分が親子とか書く時にはそこに価値を見出さないというか、優未という登場人物もそうなんですけど、友達がいなくて友達ができたゴール、たくさん友達はできなかったけど一人親友ができたね、みたいなゴールも嫌だなと思っていて、その親友がいなくてっていっばいいるので、それを成長みたいにするのはすごく嫌なんですよね。いていいし、私も友達はいますけど、それってその人の価値観なので、それこそ大人というか、エンタメのおじさんお婆さんたちが作ってきた文化だなと思っているので、それはすごく気をつけました。その人が何に価値を見出しているかで、バカにする人もいるだろうけど、そのバカにするやつはほっとけという気持ちで書いてます。

(足立佳代さん)

ありがとうございます。やはりそういう大人の価値観で子供が苦しんでいくとか、そうしなければならない、やっぱり子供たちの中の生きづらさとか息苦しさに繋がってるような気がするんですよ。

(吉田恵里香さん)

そうですね、あと言うても私も大人なので大人のざれ言なんですよね、こんな子供からしたら、だけど、ふと自分が多分大人から子供になる時とかに、そういう言葉を知ってるか、そういう考えの人がいることを知ってるってことが大事かなとは思ってます。そのさっきのカテゴリの話になっちゃいますけど、もちろん生きやすさとか楽しさとかで、マジョリティにいたことが楽なのは残念ながら間違いないので、そこに行きたいと思うことも否定はしないし、それも正しいことだと思います。ただ、誰かの考え、あなたはあなた、私は私、誰々くん、誰々ちゃんは違う、みたいなことはもっと大人が見せていった方がいいなとは思ってます。

(足立佳代さん)

そうですね。ありがとうございます。もう一つ小説家としての『にじゅうよんのひとみ』、私読んでんですけども、その話をちょっとしていただけると。

(吉田恵里香さん)

ありがとうございます。『にじゅうよんのひとみ』という小説を20代の時に書いたものが、『虎に翼』のおかげで文庫化しまして、長い時を経てもう一回世の中に。最初の方は出版社がなくなってしまったのもうほぼ絶版でしたので、手に取っていただくことができなかったんですが、文庫化することによってまた手に取っていただくようになりました。24歳のひとみちゃんが誕生日の時に目の前に赤ん坊が現れて、1時間ごとに年を、1時になったら1歳、2時になったら2歳と年を取っていく子供と出会い、それが過去の自分だったと気づき、過去の自分と誕生日を過ごしていくという話なんですけど、それも基本的に自分の選択肢の話を書いていますし、自分が今まで間違ってきた選択肢について向き合えて、自分で自分をケアしていくっていう話ですね。

(足立佳代さん)

『にじゅうよんのひとみ』の中に、吉田さんが書きたかったことがいっぱい詰まってるっていう風に後書きで書いてらしたんですが。

(吉田恵里香さん)

そうですね、ひとみちゃんっていう主人公が、丸山君という男の子と同棲してるんですけど、まあなんだかなと思って、悪くないけどなんだかなと思って生きてるんですけど、ひとみちゃんっていうのは努力ができないんですけど、でもしなくていいところで努力する、嘘を隠蔽するとか、浮気しちゃったことをごまかしてたらだらと彼氏と付き合うとか、そういうしなくていい努力をいっぱいしてしまう子の話なので、自分もでもそうするしか当時せざるを得なかった自分も見つめつつ、じゃあこの先どういう人になりたいのかわかってことを思っていく小説なので、自分の中ではケアしていく、自分自身を本当に愛でてく、肯定しつつ、時には腹を立てつつ生きていくっていうのがやりたかったことではあるので、とても思い入れのある小説です。

(足立佳代さん)

皆さん文庫では是非お読みください。

(吉田恵里香さん)

すごい宣伝してくれる、ありがとうございます。

(足立佳代さん)

『にじゅうよんのひとみ』ってひらがなで全部書いてあります。題名がですね。

(吉田恵里香さん)

はい、そうです。ひらがなで『にじゅうよんのひとみ』で、ピンクの表紙なので、文庫でよければ手に取っていただけたらと思います。

(足立佳代さん)

それでは、脚本家として、エンターテインメントの力で社会問題というか伝える、吉田さんのお考えを伝えるっていうことにもなると思うんですが、それをどういう風にやっていこうと思ってるっしょいますか。

(吉田恵里香さん)

そうですね、エンターテインメントで速攻性はなくて、オンエアしたから何かが変わるとかって本当になくて、微々たるものなんですけど、でも「あの時あの主人公これに腹立てたな」とか、「あの時あの人物これが嫌がってたな」とかっていうことを見せていくことが、「あ、自分これに怒っていいんだ」とか「腹立てていいんだ」とか、「これって誰かが決めた勝手なルールだったんだ」ってことを、その時は響かなくても何年後かに響いたりするのがエンターテインメントの力だと思っているので、それはやっていきたいなと思いますし、とにかく本当に今ね、使われすぎてあんまり言いたくなくなってきたんですけど、「生きづらい」とか「しんどい」とか「余裕がない」とか、それはみんなそうなんですよ、本当に。だからその時にこのギスギスして余裕がない時ほど人に優しくなれないんですよね。もう本当に、あ、ごめんなさい、明確な論文の名前忘れてしまったけど、忙しい時って余裕がない時ってIQが下がるんですよ、人って本当に。判断力が、ごめんなさい、確か正しい情報を言えなくて申し訳ないんですけど、本当に余裕がない時に人が大事な判断をさせるってことが間違っているのに、余裕がない時こそ人生の決断を迫られることがすごく多いので、だからそういう時に「ああ、あの時ノーって言ってた」とか「あの時あの人物が怒ってた」みたいなことが支えになったりすることがあるのかなと思って、そういうことがエンターテインメントからできる、それこそ完全に社会をよくするために書いてるだけでは当たり前ですけどないんですけど、すごく自分の中では大事にしていることなので、それをモットーにこの10年ぐらいは書いてて、しばらくこのテーマを持って書くと思います。

(足立佳代さん)

ありがとうございます。今後はどのようなテーマ、人物像を描いていきたいと思ってるっしょいますか。

(吉田恵里香さん)

今は、言わないと自分が書かないのでずっと言ってるんですけど、今小説書いてて、本当は夏に出したかったんですけどまだ書き終わってなくて、書いてるのでまずその小説を書きたいなと思っていて、それはいわゆる年齢が50ぐらいの女性、中年の話を書こうと思っていて、なんかどうしてもエンターテインメントって中年の女性を書こうとすると、スーパー弁護士とかスーパードクターとか、もしくは不倫とかになるじゃないですか、とかちょっと露出が多いものになりがちっていうのがあって、それがすごく嫌で、でもあとはじゃあお母さん役しかできないのかってのがすごく嫌なんですよね。その映像における女優さんのキャリア、女性のキャリアがすごくあるので、それに直結はしないんですけど、そ

ういう女性、年齢が 40、50 くらいの女性の話を書きたいなというのはすごく思って今書いています。

(足立佳代さん)

今の吉田さんの年齢からするとちょっと上の世代ですね。

(吉田恵里香さん)

そうですね。今書けることももちろんいっぱいあるんですけど、今私が 30 後半の人のすごい明るい話を書こうとすると、自分が経験してきてるのでちょっとブレーキがかかってしまう部分もあって、そんな現実甘くないよみたいなことを思ってしまうこともあるので、どちらかというところすごい未来に向けた自分のエールというか、つもりで書きたいというのはあります。

(足立佳代さん)

未来に向けた自分のエール、なんかとっても楽しみな気がします。

(吉田恵里香さん)

ちょっと胡散臭い感じもしますが、でも頑張ります。

(足立佳代さん)

それがまたドラマになるといいですね。

(吉田恵里香さん)

なかなか、人生うまくいくかわからないですけど、なったらその時はよろしく願いします。

(足立佳代さん)

本当に、エンタメを見る、例えばドラマを見るとか映画を見ると、その短い時間でいろんなことを感じますよね。それがやはり今おっしゃったように、それからの自分のどこかに影響を与えるっていう部分があると思うんです。だからエンタメの力ってとっても大きいと思ってるんですよ。

(吉田恵里香さん)

そうですね、すごい細かい、政治的とか「思想」が、みたいなことだけじゃなくても、めちゃくちゃ減りましたが 10 年ぐらい前とか 20 年ぐらい前のラブコメとかって一時期すごい壁ドンとかが流行った時があったと思う、今でもありますが、あれって別にイケメン限定じゃなくて、自分が好きな人にされてどうかって話で、いや好きな人でも嬉しいか怪しいみたいな状況なんですけど、ああいうのが増えると、それはその時の一過性のブームだし仕方ないんですけど、両方にとってマイナスっていうか、こういうことされて嬉し

いんだらうって思うこともマイナスだし、こういうことを思って嬉しがる女性って、みたいないろんな偏見にまみれてくるんですよね。それがシーンとして本当に必要なのかってことがあんまり吟味されないまま量産された時期が確かにあって、そういうのも自分も書く時になんか書かなきゃいけない時にどう笑いにするかとか、これはキュンとしてほしいと思ってないよっていうのを書くとかっていうのがすごい難しいなと思ってて、そういう細かいことからエンターテイメントってすごく作用しちゃうんですよね。例えば「好きだから仕方ないじゃないか」みたいなセリフとかも、好き、仕方なくないっていうか、自制しろよっていうのがあるので、そういうことをエンターテイメントでキラランランラミみたいな音楽が流れちゃうと、なんかすごい恋愛だと何でもしていいって思っちゃうみたいな、いやそんなバカなやついないよって思うと思うんですけど、人いるんですよね、やっぱりそのエンタメで見たものが「だってやってたじゃん」とかいう人が本当にいるので、すごく責任は感じます。だからそういう細かいことですけど、別にそういういわゆるテーマとしてすごく社会的かどうかってよりも、人としてどうかみたいなことはすごく気にしていて、それが結果社会でどうかにつながると思うんですけど、そういうことはすごく大事に、エンターテイメントの力だなと思ってます。

（足立佳代さん）

人としてっていうところがとても重要だなと思います。「はて」って声を上げること、とても大切だと思うんですけども、結構やっぱり勇気がいると思うんですね。「はて」と思っても、その「はて」の思いを伝えることが難しいと感じてらっしゃる方も多いと思うんです。この方々へはどんなメッセージを。

（吉田恵里香さん）

本当に声をあげたら一番速攻性はあるんですけど、それができないから困ってる方の方が多い気がしていて、私としては無言になる、笑わない、っていうのが一番いいんですけど。もうちょっと上級だと、本当に引いた顔をするのが意外とおすすめです。笑っちゃったりすると、なんか受け入れられたと思われちゃうし、うなずいたりすると肯定されたと都合よく解釈されちゃう人がいるので、声をあげられない時は黙るっていうのが、あと「信じられない」っていう顔をちょっと目を見開くとか、ちょっと黙っとくっていいのはおすすめですね。「何黙ってんだよ」とか言われたら、「驚いてしまって」みたいな、その人を攻撃するんじゃなくて、「私があくまでも驚いているだけだよ」とか、「傷ついてしまって」とか「ショックを受けてしまって」みたいな。反撃するとヒートアップする人が多いので、声をあげる必要はないです。ただ同調して笑わないとか、一緒になってやいのやいの言わないってだけでも大事なことだと思うし、その時言えなくて誰か傷ついている時に、誰か言えなかった時とかでも、その後で声をかけてあげるとかでもいいこともあると思います。怒るのって鍛錬で、自主練とか頭の中で「こう言われたらこう言おう」とかっていう訓練をしないと怒るのってすごい難しいんですよ。だからその訓練がいること自体がめっちゃ不毛だと思ってるので、黙るってことが一番いいのかなと思います。

(足立佳代さん)

今、会場からも随分笑いも出ていましたけど。

(吉田恵里香さん)

良かったです、笑っていただけで何よりです。

(足立佳代さん)

なかなか表現するって難しくて、おっしゃったように頭の中でシャドーボクシングするとか、やっぱりとても難しいですね。

(吉田恵里香さん)

する必要が本当はないことなんですよね。でもそれが自衛というか、その中で必要なことはあるとか、あとこれは別に男女関係なく、言い負かしたら勝ちみたいな、論破したら勝ちみたいな人もめちゃくちゃ世の中いるので、その人たちに相手をする必要がないとは思ってるので、勝たせてやることも必要、終わらせちゃうことも必要だし、すごく距離を取るとか、別に全員と仲良くする必要はないので、ずっと心の距離を取るとかでも全然いいと思っていて、自分にとって大事な相手かどうかってことで判断することも大事なかなとは思いますが、自分自身のことだったらやっぱり自分が一番大事な存在ですので、自分のために何ができるか、ここで声を上げないことが今一番自分を守れることだと思うなら、あげる必要はないと思いますし、自分第一で、辛い時は考えるのがいいのかなと思います。言ってる人は自分のことが大事な人なので、その人のことを思いやる必要はあんまりないかなとか思ったり思わなかったりです。

(足立佳代さん)

ありがとうございます。お聞きしているといろんな人、人、ですね。100人いれば100通りの生き方がありますよね。そういうところで、人として、そしてこの「法の下に平等である」、そして性別も人種も信条も社会的身分も、それから門地、政治的、経済的いろんなところ、まさしくこれが基本だと思って、私もこれそれまではとても大事だとは思ってたんですけども、なんかすごくという風に全面に出してはこなかったんですけども、改めてとても大事だと感じているんですが、いかがですか。

(吉田恵里香さん)

そうですね。これがもう本当当たり前のことじゃんって流せるぐらいの世の中がいいなとは思いますが。本当にこれを盾にいろんなことと戦っている人もいるし、様々なことで辛い思いをしてる人、これを支えにしてる人がいっぱいいるっていうのは、作品を作りながらすごく感じていたので、本当に大事なものだなと思うし、これがなかった時に守られなかったり、最後の砦にならないって思うと結構怖いなと思うな、特に今の世の中とは思いますね。

(足立佳代さん)

そうですね、吉田さん、今日いろいろお話をしましたけれども、吉田さんご自身、今日お話されながら新たに思われたことってありますか？印象的なこととか。

(吉田恵里香さん)

そうですね。今日本当にたくさんの学生さんが来ていただいてすごい嬉しいんですけど、日曜日だから申し訳ないなっていう気持ちがすごくあります。私の中では。何かが残ってプラスに働いてくれること、ただただ祈るばかりなんですけど、やっぱりよく学び、よく遊び、よく休み、無限の、ある程度の様々な選択肢を持つことが大前提だと思っているので、もしかしてこの日曜の休みという選択を私は奪ってしまったのかなっていうことがちょっと辛いなと思いつつ、でもお話を聞いてもらえて嬉しかったなってのが今日一番思ってます。

(足立佳代さん)

今日は本当にお仕事がお休みでも来てくださった方もあります。

(吉田恵里香さん)

そうですね、その子供、大人の方もそうですね。お休みの日の選択肢としてこれを選んでもらったことはすごく嬉しいなと思っています。でもなんか大人の方はね、自主的に来てくれて嬉しいなと思うんですけどね、学生さんはきっとそうじゃないから、かわいそうだなと思って申し訳ないなと思ってます。

(足立佳代さん)

本当に『虎に翼』のお話から、吉田さんの脚本家・小説家としてのお仕事のお話、それから「はて」と思った時にどうしたら良いかというところまで、いろいろな話をお聞きしました。たくさんのお話、ありがとうございました。今日はこれでトークは終わりとなります。